牛島家（旧寺崎家）建築調査報告書

ＮＰＯ法人八女文化振興機構

平成 24 年 3 月

1. はじめに

福岡県八女市大字本町東矢原町 327 に所在する牛島家（旧寺崎家）は、町家の伝統家屋が並ぶ八女福島伝統的建造物群保存地区の西に位置し旧往還道に東面して建つ大型の木造建築物である。現在は空き家となり建物の老朽化により痛みが著しく緊急に調査修理を行う必要がでてきた。八女福島の町並みと伝統家屋については、平成 8 ～ 9 年度に実施された九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学研究院）宮本研究室を中心とした伝統的建造物群保存対策調査により本格的な学術調査が実施され、町並みや町家の履歴とその特徴が報告書にまとめられている。旧寺崎家についても平面図や断面調査が行われているが、詳細な調査は行われておらず、また 14 年が経過していることから、今回現状の配置・平面・断面・立面の採取と実測調査を行いこれらの図面を作製し、さらに痕跡の採取と復原平面図の作製、写真撮影、来歴の聴聞を行って建築形式の変遷と価値の所在を分析した。ただ､今日までに修理や増改築による改変もあり、写真や文献資料が少なく詳細まで確認できない部分もある。それについては今後行われるであろう解体修理に伴う詳細な調査に譲り、現状把握に努めた。

図面作製は NPO 八女町並みデザイン研究会理事長の中島孝行と中島孝行アトリエの中島望が行い、久留米工業大学建築・設備工学科教授大森洋子が聞きとりを、所見は大森洋子と大森設計室代表大森久司が担当した。写真は大森久司と中島孝行が撮影した。

調査は平成 23 年 10 月～ 24 年 3 月に実施した。履歴に関しては前所有者の縁者である東京在住の原田和弘氏へ電話で聞き取りを行った。

なお、図面に書いている通り番号は、説明のために便宜上つけたもので、建物本来の番付は今回の調査では確認できなかった。

2. 八女福島の町並みと原田邸

八女福島には 17 世紀初頭、城下町が築かれたが、十数年で廃城となり、城下町の構成を残しつつも在方町として発展した。旧外堀は用水路として使われ続け、現在もよく残っている。

八女福島伝統的建造物群保存地区は、かつての城の南側を取りまくように走る旧往還道に沿って設定されており、主に江戸時代末期から明治時代にかけ

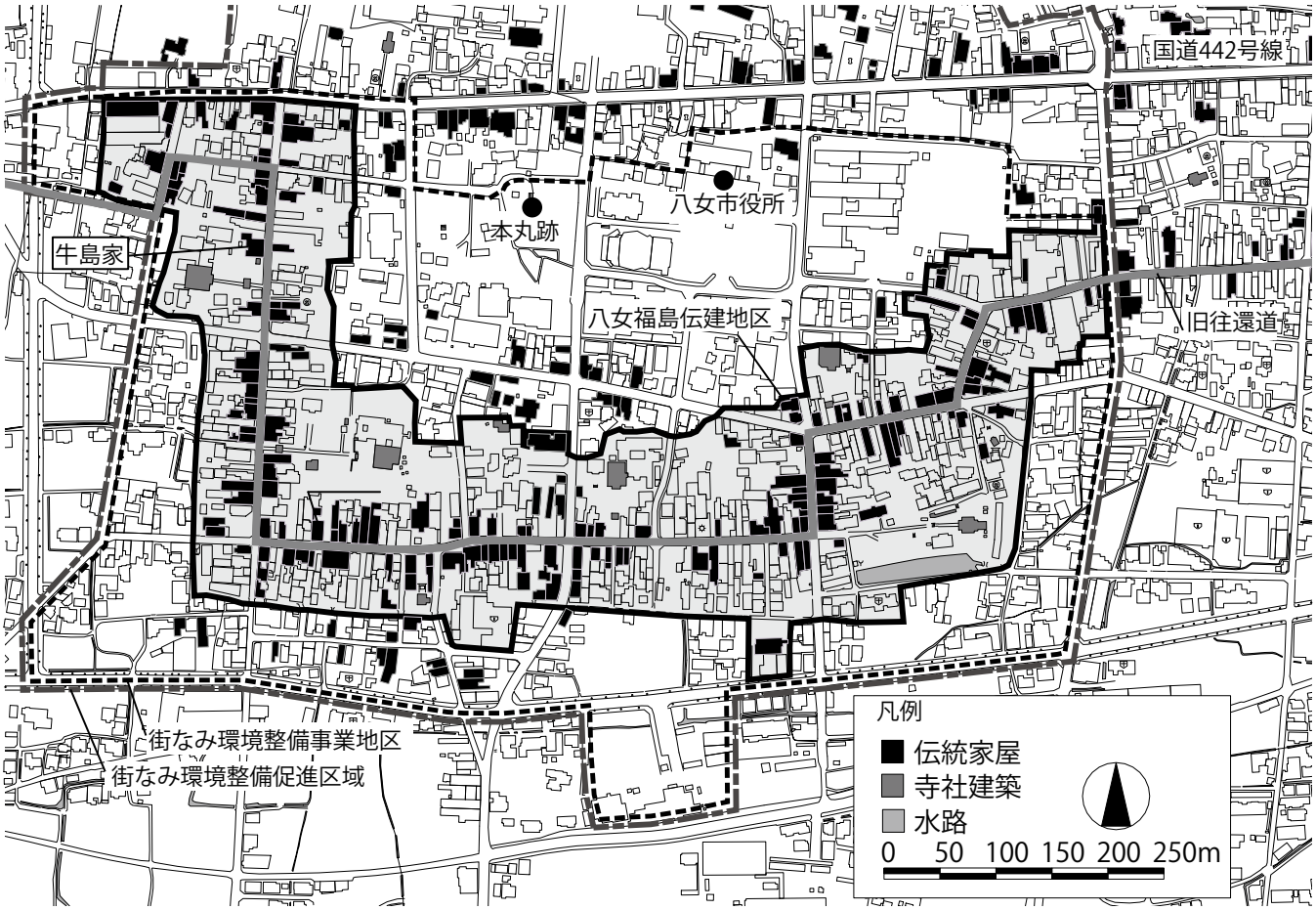

図 1　牛島家（旧寺崎家）の位置図

て建築された白壁土蔵造の入母屋2階建て妻入りの伝統町家が数多く残っている（図1参照）。一部には平入りの町家も混在している。昭和になると軽快な真壁造の町家も建てられている。町家の主要をなす居蔵造の正面外観は、主屋の両側に袖下屋を架け下ろす形式になっていることが八女福島の特徴である。また、隣家との空間を両側から使用して共有する「もやい壁」も特徴である。保存計画では、519 件の伝統的建造物（建築物174、工作物345）と133 件の環境物件が特定されている。

こうした歴史を背景に、中世に起源を持つといわれる手漉き和紙、石灯籠、近世に始まる仏壇、提灯といった多様な手工業が産業基盤として発展し、今もなお伝統的町家を工場として受け継ぐものも多い。それらの伝統産業の職人町は線状に伸びる町並みの西側半分に位置し、東側は農産物の加工品や日用品などの店舗が並ぶ商家町であった。この町の性格は現在でも継承されている。旧寺崎邸はその町並の西側を南北に走る旧往還道に東面して建つ町家である。

3. 牛島家（旧寺崎家）の履歴

建設年代を記した墨書などは発見できていないので、建設年は不明であるが、伝聞によると主屋は明治期に地主で穀物や藍の販売を営んだ寺崎忠太郎氏（昭和15年4月3日に71歳で没）が建設したと伝わっている。氏は前妻ユキ氏（明治37年12月2日に30歳で没）の間に二男二女、後妻スマ氏（昭和38年1月12日87歳で没）とは三女をもうけた。四女で結婚して原田姓になった春恵氏が牛島氏へ売却するまで所有していた。寺崎忠太郎氏は天保5年に70歳で亡くなった寺崎宗吉から五代目にあたり、八女の名家と言える。

忠太郎氏の父興平氏は明治44年、祖父茂助氏は明治36年に亡くなっている。主屋建築年代が明治中期であれば父興平氏や祖父茂助氏が関与していたとするのが自然であろう。忠太郎氏のみで建設したのであれば明治末期の可能性が高い。主屋が蔵部分を覆うように取り込み一体化していることから、蔵は主屋以前に竣工していると考えられる。離れは間取りや化粧タイルなどから大正時代の造りと考えられ、忠太郎氏が造ったと推測される。付属屋も大正の建設と思われる。付属屋1階は浴室や便所に改修されており当初の平面は確認できなかった。いずれの建物も昭和20年の航空写真で確認できる。

表1　床面積（㎡）

部位	1階	2階	合計
主屋（蔵のみ）	31.59	27.59	59.18
主屋	166.60	118.21	284.81
離れ	42.17	0	42.17
付属屋	35.28	37.66	72.94
合計	275.64	183.46	459.1
坪	83.38	55.50	138.88

4. 配置と面積

敷地は東側を南北に走る旧往還道路に面し、南および西側を正福寺に、北側を水路に接している。敷地南東に２階建の蔵があり、北側に主屋部分を増築しその折現在の屋根を架け、外観は一体となっている。そのため大きな８間の間口を持つ建物となった。その後、北西に離れと南西に付属屋を作ったと推測される。敷地西端には蔵もあったが戦後に火事で焼失している。西側に庭があり井戸や板塀などが残る。敷地北側にも板塀で囲まれた庭があるが主屋の開口状況から当初は別敷地であったものを購入したものと推測される。いずれも敷地いっぱいに建築されており土地が貴重だったことが推測される。

敷地面積は585.316 ㎡（177 坪）でさほど大きくはないが離れや付属屋を合わせた延床面積は459.10 ㎡もあり大型の町家に属する。

5. 主屋の特徴

（1）外観

主屋は2階建て南切妻、北入母屋の桟瓦葺Ｌ字型鉤屋で、南北に棟が走る。屋根の北から西に棟が突き出した外観となっている。屋根の梁間5間(約6,900㎜)桁行き6.5間（約12,700㎜）で、北側に半間、南側に1間、西側に3間の下屋を架け下ろす。軒裏は１階西面のみ垂木露しであるが、それ以外は漆喰で塗込められている。東側には持送り跡が有り道路拡幅時に軒切されている。外壁は漆喰大壁造りだが西面は開口と雨戸で壁が無い。東側2階にそろばんをデザインした黒漆喰飾で装飾された鉄製丸管がアクセントになっており、下屋が有ったころは見事な大型町家であったと思われる。

（2）外部開口廻り

東側１階の道路に接する部分は木製の引き違いガラス戸が付けられている。蔀戸の痕跡が残り開放されていたことが分かる。蔵部分には引き分けの扉が有ったが現在は塞がれている。２階の窓は肘壺だけになっているところもあるが外側に鉄扉　木製格子を建て、一筋の障子（漆喰戸の可能性もある）が嵌められて

いた。

南側１階には木製ガラス窓がある。２階は板戸が有るが現在塞がれているので詳細は不明である。西側１階は縁側にガラス戸が廻り雨戸もつく。２階は雨戸があり２本溝があるため障子があったと思われる。北側１階はガラス窓があるが開口や壁も損傷が激しく詳細は不明だが全面壁であった可能性が高い。２階には開口が無い。北側の庭は当初は別敷地だった可能性があり、単純な観賞用ではなったと考えられる。

（３）平面構成

■１階

南の蔵部分に部屋 1、ダイドコがある。通り土間をはさみ２列３室と４室の造りで、土間側である左手はが畳敷きのミセ、ミセノ間、茶の間があり、その先は縁を通して中庭がある。右手は縁のある表の間、次の間 1、仏壇と押入れをもった仏間、床の間と縁をもった座敷が続き奥行き８間ある。次の間１と部屋１にはそれぞれ吹き抜けの開口があり荷物を出し入れしていた。土間には商品台とおぼしき造り付けの戸棚や板張り部分があり、ミセには取引に使用したと思われる価格表が残されている。土間の大黒柱などは改変されていないが、階段の位置など使われ方が不明な部分も多い。聞きとりによると表の間の北側縁に箱階段があったと言われ、2 階に痕跡もある。戦後に縁１と便所が増築され、階段の位置が変わり軒切もされているが。主要室が創建当初の形を残していることは貴重である。

■２階

南から物置３（蔵部分）、物置２と階段を挟んだ部屋 3、右手の列の部屋 2、物置 1、８帖の中の間と座敷が連なる。物置１には低い手摺を回した 1.5 帖ほどの吹き抜け開口が有る。中の間と座敷は１間幅の２段の階段で上り他の部分より高い。蔵だった物置３には小さな窓が２カ所しかなく北には開口が全く無い。天井や建具が若干増設された以外当初の形を残している。

（４）軸組み

礎石に大きな野石を使い柱を立てている。足固めは丸太を使い、１階は座敷、仏間、茶の間以外は梁床天井で階高さは 2.200 と低く抑えている。「い」通りから「ち」通りまでは蔵の階高さに合わせたものと思われる。座敷１と仏間は階高 2.870 と高くなっている。屋根は流梁に地梁を渡しその上に二重梁　流梁、三重梁と短い束で重ねて棟木まで達する。垂木は杉の太鼓で杉板を野地板とし杉皮に土を載せ瓦を葺いている。物置３では蔵の既存登梁の上に束を建て妻壁にしている。転用材はあまり見られず八女の町家の典型的屋根組構造をしている。

（５）各室意匠（別表参照）

通り土間 1、ミセ、次ノ間、表ノ間、仏間、座敷ともはほぼ当初のままである。座敷と仏間は上質な造りで床の間には狆潜り、床脇に天袋、違い棚があり典型的な座敷の造りとなっている。廻り縁の障子敷居溝が３本になっているのは明治期の特徴と思われる。釘隠しや襖などは残念ながら紛失しているが、欄間などは残っており、早急な復原修理が望まれる。

6. 離れ

（１）外観

離れは入母屋造り平屋建で東西に３間の棟が走る。東西に半間、南に４尺の下屋と丸太の縁桁のある濡れ縁を配する。南東の鏡板戸のある廊下で主屋廻り縁に接している。外壁は真壁造りだが縦羽目板張りを地盤面から７尺程度立ちあげている。当初からの仕上げであるかは不明。軒裏は垂木露しである。濡れ縁の南西に鍵型の桟瓦葺真壁造りの塀があり井戸などの目隠しとなっている。

（２）外部開口廻り

西側に開口は無く北側も洗面所と手洗いにガラス小窓があるのみである。東は３帖の部屋にガラス戸が便所にガラス窓が嵌められている。南は縁の部分にガラス戸が建てられているが当初からかは不明である。

（３）平面構成

床の間と床脇が付いた８帖の座敷に縁、その東側に廊下を挟み便所と３帖の和室を配した間取りとなっている。

（４）軸組み

礎石に柱を立て足固めを使い桁に梁を架けた単純な構成だが、入母屋部分の棟高さは２階に相当する。
濡れ縁は３間の縁桁に化粧垂木を掛けている。桔木など詳細は不明。

（５）各室意匠

濡縁は化粧軒裏として軽快に仕上げている。座敷は離れ的な簡易な造りでなく正式な床ノ間と天袋や違棚のある床脇を備え、欄間を施した付書院も上質に仕上げられている。障子上の櫛状の欄間も見事である。洗面や便所などの水廻りは歪みの少ない純白タイルで市松貼りに仕上げられている。このボーダー付きタイルは輸入品の可能性もある。現在のところ全体に痛みが無く比較的容易に修理が可能である。

7. 付属屋

（1）外観

付属屋は東切妻、西寄棟の２階建てで東西に２間半の棟が走る。東は４尺強の下屋で主屋の蔵部分に接し、北東は主屋の２階下屋と接する。西には半間の下屋を下ろし、北西にトタンで簡易な下屋を付けている。外壁は真壁造りだが南側は縦羽目板張りを地盤面から５尺程度立ちあげている。当初からかは不明である。軒裏は垂木露しで、２階南に縁を出している。

（2）外部開口廻り

西側、東側に開口は無い。北側は中庭に出入り口や2階にガラス窓と雨戸があるが格子の跡があり雨戸は後付けの可能性がある。南側は１階、２階とも敷地境界偽してるが開放的なデザインとなっており、北側が完全に閉じられているのとは対照的である。１階浴室廻りの腰は煉瓦造となっている。

（3）平面構成

１階は東側をダイドコに使い板の間と３帖の部屋を挟み浴室、便所を西端に配する。

（4）軸組み

礎石に柱を立て足固めを使い桁に梁を架けた単純な構成で１階部分がかなり低い。土間が大きく、梁間方向に足固めがない。２階床は梁床天井である。２階縁は手のこんだ波模様の持送りで支えられた張り出しとなっており時代は古いと考えられるが、手摺はロクロ加工を施し比較的新しい。

（5）各室意匠

１階は土間でダイドコとして使われたが古いクドなどは見当たらない。浴室や便所は改変されているが扉等は質が高く当初のものと思われる。階段については非常に登り難くこれも改変の可能性がある。２階座敷は釘隠しのある長押を回し床の間や棚などがある。富士山を描いた欄間などこだわりを感じる。縁がいつ頃どのような経緯でできたかは不明だが、軽やかなデザインで主屋とは違う趣をかもし出している。

8. まとめ

牛島家（旧寺崎家）は規模が大きく、明治から増築を繰り返した八女の町家の形成過程が分かる非常に貴重な建築である。極一部の水廻り以外は当初のままであることも特筆に値する。徐々に損傷分が拡大しており、このままだと倒壊する危険がある。内部には当時のタンスや食器なども残り修復して開放すれば重伝建地区の特質の向上に寄与することは確実である。関係各位におかれては是非にも早急な修理工事の実施に向けて御尽力いただけるようお願いしたい。

【参考文献】

1. 八女市編纂専門員会編『八女市史上巻』、『八女市史下巻』、『八女市史年表編』（八女市、1992 年）
2.『八女福島伝統的建造物群保存対策調査報告書』（八女市教育委員会、1998 年）

表２　主屋仕上げ表

階	室名	床	壁	建具	天　井	備　考
主屋 1階	部屋1	板張	塗り壁	引分け戸　引き戸	梁床天井	
	ダイドコ	たたき	塗り壁	引き戸　無双窓	梁床天井	井戸
	通り土間1	たたき	塗り壁	蔀戸　吊大戸	梁床天井	板張1　箱吊棚（波型模様持送り付き）
	通り土間2	たたき	塗り壁	引き戸	小屋裏表し　ススで非常に黒い	板張2
	ミセ	畳（6帖）	塗り壁	蔀戸	梁床天井	上がり框
	ミセノ間	畳（6帖）	塗り壁	ふすま　障子	梁床天井　一部竿縁天井	上がり框　神棚
	茶ノ間	畳（8帖）	塗り壁	ふすま　障子	竿縁天井	吊棚
	縁1	縁甲板張	塗り壁	雨戸　鏡板戸	化粧垂木　化粧野地板	
	表ノ間	畳（6帖）	塗り壁	ふすま　障子	梁床天井	
	縁2	幅広板張	塗り壁	雨戸	梁床天井	
	次ノ間1	畳（6帖）	塗り壁	ふすま　障子	梁床天井　吹き抜け	槍掛け
	縁3	幅広板張	塗り壁	雨戸	梁床天井	
	仏間	畳（8帖）	塗り壁　長押（杉面皮）釘隠し	ふすま	竿縁天井	
	押入	板張	塗り壁	ふすま	梁床天井	
	仏檀	幅広板張	塗り壁	ふすま	梁床天井	差敷居
	座敷1	畳（8帖）	塗り壁　長押（杉面皮）釘隠し	ふすま　障子　欄間	竿縁天井	平書院　（半間）
	床ノ間	幅広板張（畳床？）	塗り壁		竿縁天井	狆潜り　床框（黒柿）　落掛け（黒柿） 床柱（絞り杉丸太）
	床脇	一枚板張→畳	塗り壁	ふすま（金紙の上雲龍紙貼り）	竿縁天井	天袋　違い棚
	廻り縁	縁甲板張	塗り壁　長押（杉面皮）釘隠し	雨戸　欄間（型板ガラスはめ殺し）	化粧垂木　化粧野地板	
主屋 2階	物置1	幅広板張	塗り壁	–	小屋裏表し	幅広階段　吹抜け手摺
	階段	–	–	–	–	聞きとりによれば箱階段
	部屋2	幅広板張	塗り壁	鉄板開き窓	小屋裏表し	
	物置2	幅広板張　神棚上立ち上り	塗り壁	鉄板開き窓	小屋裏表し	
	中ノ間	畳（8帖）	塗り壁	ふすま　欄間	竿縁天井	
	押入	幅広板張	塗り壁	ふすま	小屋裏表し	
	座敷2	畳（8帖）	塗り壁	雨戸　障子	竿縁天井	
	床ノ間	幅広板張（畳床？）	塗り壁		竿縁天井　（勾配天井）	床框　落掛け 床柱（絞り杉丸太）
	押入	幅広板張	塗り壁	ふすま	小屋裏表し	

表３　離れ仕上げ表

階	室名	床	壁	建具	天　井	備　考
離	座敷4	畳（8帖）	塗り壁　長押	障子	竿縁天井	付書院 欄間
	床ノ間	一枚板張	塗り壁		竿縁天井	狆潜り　床框　落掛け　床柱（絞り杉丸太）
	床脇	幅広板張	塗り壁	フスマ	竿縁天井	無目　天袋　違い棚
	縁4	縁甲板張	塗り壁　長押	ガラス戸　欄間（ガラスはめ殺し）	竿縁天井	
	3帖2	畳（3帖）	塗り壁　長押	障子　ガラス戸	竿縁天井	出窓
	廊下	縁甲板張	塗り壁	板戸	竿縁天井	洗面所（外国製タイル？）
	大便所	タイル	腰タイル　塗り壁	ガラス戸	竿縁天井	
	小便所	タイル	腰タイル　塗り壁	ガラス戸	竿縁天井	
	手洗イ	タイル	腰タイル　塗り壁	ガラス戸	竿縁天井	

表４　付属屋仕上げ表

階	室名	床	壁	建具	天　井	備　考
付属屋1階	板ノ間	幅広板張	塗り壁	障子　ガラス戸	梁床天井	
	3帖1	畳（3帖）（土間たたき？）	塗り壁	ガラス戸	梁床天井　梁欠き有	梁欠があり床が100以上低かったと思われる。
	浴室	–	塗り壁	ガラス戸	–	復原は不明な点が有る
	大便所	縁甲板張（土間たたき？）	塗り壁 腰板張　H300	ガラス戸　舞良戸	梁床天井	復原は不明な点が有る
	小便所	縁甲板張（土間たたき？）	塗り壁 腰板張　H300	ガラス戸	梁床天井	復原は不明な点が有る
付属屋2階	座敷3	畳（8帖）	塗り壁　長押 釘隠し	ガラス戸　障子　欄間	竿縁天井	
	床ノ間	床板張（1枚もの）	塗り壁	–	竿縁天井	狆潜り（黒柿）　床框　落掛け　床柱（杉丸太）
	棚	床板張（1枚もの）	塗り壁	–	竿縁天井	無目（黒柿）
	次ノ間2	畳（6帖）	塗り壁　長押	雨戸　障子　ガラス戸　ふすま	竿縁天井	
	縁5	幅広板張	–	雨戸	幅広板張	手摺、手摺子は刳り棒（回転体の手摺子）　変形櫛状欄間
	階段	木製	–	折上げ板戸	–	手摺、手摺子は刳り棒（回転体の手摺子）
	押入	幅広板張	塗り壁		竿縁天井	

写真 1　往還道に東面する主屋

写真 2　付属屋西側外観

写真 3　主屋 (右手）と付属屋（左手）の南側外観

写真 4　離れ西側外観

写真 5　離れ（左手）と主屋（奥）の縁

写真 6　付属屋 2 階の縁を支える持ち送り

写真 7　主屋 2 階東側の窓

写真 8　外壁に取り付けられた鉄製丸環

写真 9　主屋座敷 1

写真 10　主屋次ノ間 1

写真 11　主屋表ノ間

写真 12　主屋ミセ

写真 13　主屋茶ノ間

写真 14　主屋床下の大引きと足固め

写真 15　主屋 2 階座敷 2

写真 16　主屋 2 中ノ間

写真 17　主屋 2 階物置 2

写真 18　主屋 2 階物置 1

写真 19　主屋小屋組

写真 20　主屋蔵部分の小屋組

写真 21　主屋座敷 1 の欄間

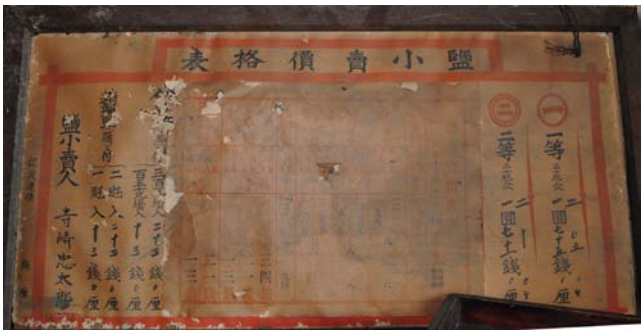

写真 22　残されていた藍価格表

写真 23　離れ座敷 4

写真 24　付属屋 2 階座敷 3